

氏名（本籍）	ともきよ だいすけ 友 清 大 介（鹿児島県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 98 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 35 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	ベラスケス絵画における未完成性の考察
論文審査委員	主 査 教 授 大 矢 英 雄 副 査 教 授 加 治 屋 健 司 副 査 教 授 大 井 健 二

論文内容の要旨

スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットはベラスケスについて「描かないこと、つまりわずかしか描かないことによって特徴づけられる画家である」「未完成の画家」と断定した。

芸術作品の未完成とは、完成に至らない段階で制作が止まり、ついに制作が再開することのないまま放置されてしまうことである。作家の死によって完成まで至ることができなかったもの、何らかの事情で制作を続けることができなかったもの、途中で完成させることを諦めてしまったものなど、未完成の要因は様々である。そしてその作品が完成されているのか、未完成であるのかを判断する確実な方法は作家の言葉である。だが、自らの作品についての、ベラスケスの言葉は残っていない。ベラスケスの作品に未完成作が多いとして、研究者たちはその理由を模索し、言及してきた。そこで宮廷画家であったベラスケスは、宮廷の雑務に忙しく制作に時間が割けなかったと一般に考えられている。

本論では、ベラスケスの未完成風の表現が意図的であったと主張する。そこで未完成の要素を未完成性と名付け、技法の変遷、特異性、その科学的論拠、宮廷画家の境遇から検証を行う。最終的な結論は、ベラスケスは自らの絵画が多義的解釈を持つことを目指した。そのために不確定性の要素を盛り込んだ。ベラスケス絵画における未完成性も、意図的に表現された不確定性の一因であった、とした。

○論文構成

序論

第1章：ベラスケス作品における未完成性の検証

第1節：ベラスケス作品における筆触の現れ

1. 近代画家の筆触との比較
2. ベネツィア派と同世代の画家の筆触との比較

第2節：ベラスケス技法の特異性

1. 地、組成の変遷
2. 筆触と薄い絵具層
3. 残された地

第2章：未完成性の根源——近代絵画

第1節：公衆と展示形式による未完成性の成立

第2節：批評による未完成論争

第3節：写真が絵画に与える未完成性

第3章：ベラスケス絵画における未完成性

第1節：道徳的圧力、社会的圧力から解放された地位

第2節：主題における絵画表現の意図

1. 宮廷画家着任前のボデゴンにおける意図
2. 宮廷画家着任後の宗教画における慎重さ

第3節：ベラスケスの絵画表現における目的

1. 神話画における構成の「不確定性」
2. 描写における「不確定性」

第4章：現代におけるベラスケス絵画再考

第1節：絵画の「還元」に向かう自己批判

第2節：かつての巨匠たちによる自己批判

結論

1. 本論のまとめ
2. 《ラス・メニーナス》による「終わりなき絵画」

論文審査の結果の要旨

本論文は、17世紀スペインの画家ディエゴ・ベラスケスの作品に見られる「未完成性」を考察したものである。ベラスケスの絵画作品に見られる筆跡、薄塗り、塗り残しなどを、失敗や時間の欠如といった消極的な原因に帰するのではなく、画家の積極的な探求の成果であると主張した論文である。第1章では、個々の絵画作品を取り上げて、筆跡、薄塗り、塗り残しとその効果を具体的に観察・検討している。第2章では、未完成性を指摘されてきたエドゥアール・マネなどの近代絵画を考察しつつ、それと関連するシャ

ルル・ボードレールの「出来た」と「仕上がった」に関する議論を検討している。その上で写真の発明との関連にも言及している。第3章では、ベラスケスが活動した社会状況を踏まえつつ、絵画の構成における「不確定性」の積極的な意義を考察している。第4章では、フォーコーやグリーンバーグの近代絵画論を批判的に参照して、近代絵画の嚆矢という位置付けを再検討している。結論として、《ラス・メニーナス》を「終わりなき絵画」と位置づけ、鑑賞者の解釈に開かれた、多義的な絵画の成立を見出している。

本論文は、ベラスケス絵画を「未完成性」という視点から包括的に論じるという、明確な主張をもった論文であり、制作者として技法的な問題を検討している点も高く評価できる。以上のことから、本申請において合格とした。